

令和 6 年度 栄東中学校入学試験問題

東大特待 I (1月12日)〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で 26 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、問題用紙と解答用紙は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」も 1 字として数えるものとします。

一 次の（1）～（8）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・（1）だから助けてください。
- ・お（2）でもほめられたらうれしい。
- ・この墓には（3）した天才画家が眠っている。
- ・この企画のメリットは（4）にいとまがない。
- ・必死の（5）で走る。
- ・（6）にとらわれない考え方。
- ・（7）を重ねた上での決断。
- ・誰にも（8）することなく独学をつらぬいた。

【語群】

シジ	セジ	ソウセイ	ゴシヨウ	マイキヨ	ジョウセキ	ギョウソウ	ジュツコウ
----	----	------	------	------	-------	-------	-------

二 次の（1）～（10）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・（1）世の中になったものだ。
- ・（2）もまけてくれない。
- ・約束を（3）にされていら立つ。
- ・（4）なく意見を述べる。
- ・人の（5）ばかりしてきられてしまう。
- ・（6）を決めこむ。
- ・（7）な感想ばかりでつまらない。
- ・（8）な態度で人に接してはいけません。
- ・彼の話は（9）だ。
- ・彼のおだやかな（10）がうかがえるエピソード。

【語群】

カ	ア	イ	ウ	エ	オ
反故	忌憚	日和見	眉唾物	びた一文	あらさがし
キ		月並み	高飛車	人となり	世知辛い

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現在、国内に残っている木桶は四五〇〇〜四七〇〇本といわれていますが、そのうち一一〇〇本が小豆島に集中しています。昔ながらのつくり方の醤油蔵が多く残っている、ちよつとめずらしい地域です。

木桶が今日までこんなにたくさん残った理由は、

「木桶の価値を意識しながら近代化したから」

戦後、日本の醸造業が設備を近代化し、どんどん変わっていく中で、小豆島の蔵元は、木桶を捨てませんでした。大規模生産を目指した蔵元は、木桶をたくさん集めて工場にずらりと並べるといって、ちよつとユニークな近代化の道をたどりしました。

近年、木桶の良さが見直されてきています。一九八〇年代から、こだわりの商品を置く自然食品店や、生活協同組合、会員制宅配の会社などで、蔵元ごとの個性を感じることができて、時間をかけて伝統的な製法でつくる木桶仕込み醤油を選んで買う消費者が増えてきたのです。

近代的な設備でつくられた醤油は、クセがなく、品質のブレもなく、均一にレベルが保たれる反面、個性にとぼしいという面があります。

「こんなふうに、木桶仕込みの醤油に付加価値がつく時代が来るとわかっていたら、あのととき蔵や木桶をつぶすんじゃないかなあ。一度壊してしまつたら、もう二度とつけれないもんなあ」と後悔する蔵元もいます。

そもそも、なぜ木桶はこんなに減ってしまったのでしょうか？

藤井製桶所の上芝雄史さんが持っている資料によると、明治、大正の頃には輪竹（たが）にするための竹の業者の組合、樽の底をあつかう業者の組合、フタをあつかう業者の組合があり、さらに樽は樽でも酒樽と醤油樽をつくる業者の組合は別々に存在していました。また、木取り商といって、桶専門の材木問屋さんもいました。

組合が別々にあることからわかるように、かつての桶づくりの仕事は完全に分業化されていました。また、それぞれ専門分野とし

て作業を分担しなければならぬほど、桶や樽関連の仕事が多かったことが想像できます。

桶の材料は、桶づくりを依頼する造り酒屋や醤油屋が木取り商から買って桶師にわたします。桶師は造り酒屋の敷地に入入りして桶をつくりまわす。桶師は出職といって道具を持って全国をわたり歩き、桶づくりの「手間」²だけでお金をかせぐしくみでした。

ご飯を入れる A や洗面桶など生活に使う小さな桶づくりは小仕事といい、こんこん屋、とんとん屋とも呼ばれる町の桶屋さんが担当しました。「B から C まで」といわれるほど、桶は人が一生を通じてつきあう生活必需品でした。

明治時代の記録を見ると全戸数の一〇〇軒に一軒が桶屋だったことがわかり、これは二つか三つの町ごとに必ず一軒は桶屋があった、という計算になります（小泉和子編『桶と樽——協役の日本史』法政大学出版局より）。

赤ちゃんが産湯をつかう産湯桶、毎日井戸から水をくむつるべ、水桶、たらい、おひつ、食べ物を入れて運ぶ岡持ち、風呂桶（浴槽）、洗面器用の小桶、手桶、棺桶、日常のさまざまな場面で桶が使われていましたから、これだけ桶屋があつたのも当然かもしれない。

桶を締めるたがについては、今でも使われている慣用語がたくさんあります。

箍がはずれる 緊張がとけてハメをはずしてしまうこと。それまでの秩序がなくなること。

箍がゆるむ 秩序がなくなること。緊張がゆるんだり、年をとって鈍くなったりすること。

箍をしめる ゆるんだ秩序や決まり、気持ちを引きしめること。

なんともいいセンスですね。

さて、この頃の木桶の一生には、大きなサイクルがありました。江戸時代、数ある職業の中で、かせぎが良かったのは酒蔵でした。大桶づくりにはお金がかかりますが、まず、お金を持っている酒蔵が新桶を注文します。ここが木桶のサイクルのスタートです。

酒蔵が新しい桶でお酒を醸しているうちに、二〇年から三〇年たつと木桶からお酒がしみ出すようになってきます。

そうになったら、大桶を一度解体し、ばらした板を削って組み直し、次は醤油屋に引き取られます。醤油には塩分があるので、塩の効果で木桶は腐りにくく、塩分が固まって隙間をうめるためにもれづらくなり、技術の高い桶職人がつくった桶であれば、さらに一〇〇年近く使うことができます。

場合によっては醤油屋で使われた後に、味噌屋に行くこともあります。もちろん、醤油屋から味噌屋に行かないパターンや、醤油屋が新しい桶をつくるパターンもあります。

木桶に逆風が吹き始めたのは、時代が昭和に入ってからのことです。大桶を使うサイクルが狂い始めたのです。まず、スタートの鍵をにぎる酒蔵が、新桶をつくらなくなりました。

第二次世界大戦中、そして戦後と、酒蔵は厳しい状況に置かれていました。食べるものがなくて餓え死にする人がたくさんいた時代、米を発酵させてアルコールにするお酒が超えたいく品だったことは間違いない、つくる量を極端に制限しなければなりません。なんとか酒蔵を絶やさないために、数軒の酒蔵を合併してほそと製造を続けたところも少なくありません。

戦争が終わり、GHQ（連合国最高司令官総司令部）の統治が始まりますが、アメリカからみた日本の醸造発酵の世界というのは、ひとことというなら「クレイジー」だったようです。

たとえば醤油なら、原料を仕込んでから一年以上経たなければ商品（醤油）ができないという悠長さ。仕込んだ大豆や小麦のうち、四〇パーセントがしぼりかすになってしまう効率の悪さ。さらに、木桶は「不潔」であるとして、極力使わないように、と保健所が指導してまわりました。

そしてもっとも影響が大きかったのは、酒づくりで起こる欠減の問題でした。

欠減というのは、酒を仕込んで完成するまでの間に蒸発して減ってしまう分のことです（樽で仕込むウイスキーやワインの世界ではこれを「天使の分け前（エンジェルズシェア）」と呼び、お酒がおいしくなるために天使にあげる分、ととらえます）。

「桶が酒を飲む」といわれるくらい、木桶は木の肌で酒を吸います。また、樽と違って密閉されていないため、蒸発して減ってしまふ分も加わって、ホーローやステンレスなどのタンクと比べて、欠減が大きくなります。つまり、木桶でつくと酒蔵が損をする

というわけです。

不潔だのなんだのと言われたうえに損をするんじや、割に合わない……、酒蔵が一斉に木桶からホーロータンクに切りかえていきました。当然、酒の味はがらっと変わります。

当時、消費者から「戦後の酒はうすっぺらい」「味が無い」「カドがある」など、さまざまなクレームが寄せられたという記録が残っています。これは一〇年ほど続きましたが、やがて消費者も慣れたのか、クレームも減っていきました。

当時は、アルコールであればなんでもいい、という時代でした。三増酒、合成酒といわれる粗悪な酒をみんな喜んで飲みました。三増酒は戦時中に生まれたお酒で、米と米麴でつくったものに、水でうすめたアルコールやぶどう糖を足し、酸味料やうまみ調味料で味を整えたものです。もとのもろみの三倍の量になるので三増酒。こういうお酒がやりました。

当時の状況からすれば無理もないことですが、日本酒本来のつくり方、味でなくともいいという人が多かったため、いつしか本来の酒の味が忘れられていったのです。

これは醤油も同じでした。戦時中、食糧難を乗り切るために脱脂大豆を塩酸で分解し、これに甘味料やカラメル色素を加えた「アミノ酸醤油」が出回ります。また、南の国から入ってくるココヤシのかす（油をしぼった後のもの）で麴をつくり、これと醤油のしぼりかすを使って醤油をつくる「新式醤油」が登場します。いよいよ食糧がなくなってくると、塩水に醤油のしぼりかすで色をつけた「代用醤油」も出回りました。

そして戦後も、激しい食糧不足は続きます。その時に、今も醤油を主力商品とする食品メーカー、キッコーマンの研究員が、醤油のもろみにアミノ酸液を加えて一緒に発酵させる新式二号という製法を発明しました。この醸造方法は、日本の醤油醸造業を救ったといわれる画期的な方法でした。五〇日間で完成し、味もそれなりに満足のいくものです。

アミノ酸液を加えて速醸するというと、現在だとイメージが良くないかもしれませんが、この発明が「日本の醸造業はクレイジーだ、とても原料大豆を支援することはできない」といっていたGHQを動かし、醸造してつくる醤油業界に原料大豆をまわしてもらえることになったのでした。この技術のおかげで現在の醤油業界が生き残ることができた、といわれています。

藤井製桶所の上芝雄史さんによると、こういった蔵元が抱えていた事情以外にも、当時、戦争で失った家を再建したい人が多く、

木材が高騰したことも、木桶の減少に影響したといえます。

木材の高騰と逆に、軍需産業がなくなったことで、鉄が余って安くなりました。こうして戦時中に軍艦をつくっていた会社が、次の活路としてホーロータンクをつくるようになったのです（ホーローは、鉄などの金属のまわりをガラスでコーティングしてつくられます）。このホーロータンクも戦後のいつとき多くつくられましたが、現在では一社しか製造するところが残っていません。

生活の道具として使われてきた小さい木桶は、プラスチックが登場してから取って代われ、生産量がガクンと減りました。

（竹内早希子『巨大おけを絶やすな！ 日本の食文化を未来へつなぐ』より）

問一——線部1「付加価値」とは何ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア その蔵で作った醤油にしかない独特な香りやしよっぱさ。

イ 近代的な設備で作ったのではなく木桶で作ったという製造方法。

ウ 木桶仕込みならではのクセや個性が均一に保たれること。

エ 自然食品店や、生活協同組合で醤油を売ってもらえること。

オ 醤油の味が均一ではなく個性にとばしいということ。

問二——線部2「手間」のここでの意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 発見

イ 技術

ウ 進歩

エ 移動

オ 仲介

問三 本文中の A C に入れるのに最も適切な言葉を、三字以内でそれぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

問四 本文中の D にはどのような内容の文が入ると考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ゆるんだりしまったりする柔軟なたがの性質を、秩序や法律を柔軟に運用することが重要であるということにたとえているという内容。

イ たががなくてもほかの材料がしっかりしていれば桶や樽ができあがることを、人間社会の協力や秩序にたとえているという内容。

ウ 桶や樽作りでたがは最後にしめることを、秩序や規律は人の生活文化の中で最後にできあがったことにたとえているという内容。

エ たががはずれたりゆるんだりすると桶や樽がばらになっってしまうことを、人間社会の規律や秩序にたとえているという内容。

オ たがさえしつかりと作れば桶や樽ができあがることを、人というものは緊張感や気のゆるみで結果が大きく変わるものだという内容。

問五 ―線部3「アメリカからみた日本の醸造発酵の世界というのは、ひとことでいうなら『クレイジー』だったようです」とあ

りますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 効率よく大量生産することが当たり前と考えるアメリカ人にとってみれば、たとえ時間がかかって、無駄が多く出たとしても、昔ながらの製法で非常に上質な酒や醤油を生み出す日本人の醸造技術は、考えられないほどの高い技術なので、そのままにしておく、アメリカをおびやかすほど技術が進歩、発展して、将来、再び日本が敵国になると危険視されたということ。
- イ 日本人にとってなんら気にならないことであっても、アメリカ人にとって日本の木桶や樽作りの方法は伝統的な醸造業と同じで、効率が悪く無駄が多く、悠長で、不潔であるという欠点ばかりが目立ち、それを続けていることは異常なことであつて、戦後の日本を統治する際にはそういった産業には材料の支援や協力はできないという判断の原因になったということ。
- ウ 日本人が行う物作りは、大量に速く製品を作るのが当たり前のアメリカ人の目には、遅くて無駄が多くて不衛生で量も少なく、品質もそれほどよくないものに映つたため、もっと効率がよく大量生産できて安全で近代的な製造方法を教えることによつて、それまで日本人にとって普通だつた悠長で利益よりも伝統を重んじるという考え方自体を変えようとしたということ。
- エ アメリカ人からみると、なかなかできあがらないことや作っているうちに量が減つていってしまうこと、材料の半分近くがかすになってしまうことや、汚いと感じてしまうことといった数多くの点で日本で昔から伝統的に行われてきた木桶を使った酒造りや醤油造りの方法は理解できないもので、こういった製品の製造に協力はできないと判断されたということ。
- オ 木桶を使った日本の伝統的な醸造方法を行うと、普通であれば多くかすが出たり、欠減の割合が多かったり時間がかかったりする問題が解決されるため、アメリカ人は日本の醸造発酵の技術に驚き、唯一の欠点である不潔であるという衛生面の解決が必要であることを指摘してそれが解決されれば材料をまわすことができるかと判断することになったということ。

問六 ―線部4「当時の状況からすれば無理もないことですが、これはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア GHQからの指示や統制がある状況では、質を落とした三増酒、合成酒しかつくることができないことは納得できるとのこと。
- イ 贅沢品である酒をつくるのが制限されてしまっている状況なので、質を落としても酒をつくろうとするのは仕方がないということ。
- ウ 戦後の食糧不足の状況下では、贅沢品である酒は飲めるだけでかまわないので、質の悪い三増酒がはやるのは理解できるとのこと。
- エ ひもじい思いをしている状況なので、酒で飢えを満たしたいという思いから三増酒を求める人々が増えるのは仕方がないということ。
- オ 欠減などの不利な点がある状況下での酒づくりであっても、酒づくりを絶やさないために三増酒をつくるのはやむをえないということ。

問七 ―線部5「これは醤油も同じでした」とありますが、醤油のどのような点が日本酒と同じなのか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問八 ―線部6「この醸造方法は、日本の醤油醸造業を救った」とありますが、これはどういうことですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問九 あなたが醸造業を営む場合、伝統的な日本のやり方と、近代的な設備で作るやり方のどちらを行いますか。本文をふまえ、理由とともに答えなさい。伝統的と近代的のどちらを選んでも試験の点数に差はつきません。

四 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

湖風祭前後にカップルが激増するという話があるそうだが、ご多分に（ ）一年三組にも甘い空気が漂ってきた。誰が誰に告白したというわさ話を小耳でキャッチして、相関図に反映させる。先輩や別のクラスの生徒と付き合う人もいて、人間関係は広がりを見せた。従来のグループから逸脱する人もいれば、もとの線を保つ人もいる。入学当初から仲良くなりそうだったと感じるカップルもあれば、意外な組み合わせもあって、リアリティ番組のように楽しんでいた。

そんな（ ）の見物を決め込んでいたわたしに、想定外の事件が起こる。

「大貫さん、一緒に帰らない？」

校門を出たところで声をかけられ振り向くと、同じクラスの須田直也が立っていた。須田とは同じ大道具係で何度か会話を交わしたが、好意を持たれるような内容ではなかったはずだ。物腰が柔らかく、わたしたちのような女子でもむやみに傷つけないタイプだと思っていたけれど、まさかわたしに向けて線を伸ばしてくるとは思わなかった。

たしか須田は草津駅近くのマンションに住んでいると言っていた。徒歩通学のわたしとはどう考えても経路が違う。

「なんでわたしと？」

須田は少しだけ周りをうかがってから、「大貫さん、東大目指してるでしょ」と言った。

「どうして知ってるの？」

須田はリュックから『東大英語1』の緑の表紙を覗かせた。塾で使っているテキストで、わたしも同じものを持っている。

「鞆に入ってるのがたまたま見えちゃって。僕も草津駅前校に通ってるんだ」

何も言えずに視線を落としていると、須田の方から口を開いた。

「まあ、その、付き合うとかじゃなくて、情報交換できたらいいなと思って」

さっそくフラグをへし折られたが、それはそれで悪くない気がする。わたしたちを取り囲むもやもやが晴れて、須田がかけているメガネの黒いフレームがくつきり見えた気がした。

「わたし、これから家で勉強するんだけど、須田くんも来る？」

言ったそばからずいぶん大胆な提案をしてしまったと後悔するが、すでにそういう間柄ではないことは確認できている。須田は「大貫さんがいいなら」と家まで付いてきた。

玄関の鍵を開けた瞬間、急激に面倒くさくなった。わたしの部屋はわたし一人のために最適化されていて、もうひとり迎え入れるようにはなっていない。中学に入ってから女子ですら来たことがなかった。

ひとまず「わたしの部屋、散らかってるから」とダイニングテーブルに案内した。母と妹は六時頃まで帰ってこない。何も出さないので悪いかと思い、グラスに麦茶を入れて出す。

「とりあえず、数学の宿題してみる？ 大貫さんがどんなふうやってるか知りたいし」

別の人間と勉強するのは気が散るかと思ったが、須田の気配は薄く、支障はなかった。一通り問題を解いた後、「ここが難しかった」とか、「ここは時短できる」など感想を言い合う。解答に至った思考の流れを細かく説明すると、須田は「わかる」とか「それはすごいね」などと気持ちのいい相槌を打ってくれた。これまで自分をコミュ障だと思っていたが、単に

「八月のオープンキャンパス、大貫さんは行く？」

東大のオープンキャンパスがあることはホームページを見て知っていたが、まだ一年生だし、わざわざ新幹線に乗って行くという発想がなかった。コロナが流行る前に家族でデイズニーランドに行つて以来、新幹線にも乗っていない。中学の修学旅行も本来は東京に行くはずだったのに、伊勢神宮とおかげ横丁の日帰り旅行でお茶を濁された。

「須田くんは行くの？」

「まだ決めてなくて。大貫さんが行くなら行こうかな」

そんなふうに言われるのははじめてで、気持ちが盛り上がるのがわかる。

わたしはスマホで東大のオープンキャンパスについて改めて検索してみた。その日は塾の夏期講習があるが、オープンキャンパスのためなら休んでも構わないだろう。

「行ってみようかな」（中略）

「ここ二年はコロナで中止だったんだって。今年は開催でよかった」

須田は小学生のごとく無邪気に楽しみにしている様子だ。

その日の夜、友達とオープンキャンパスに行きたいと話すと、母は「友達できたの？」と驚いた様子だった。男子だと知られると厄介なことになりそうなので、草津に住んでいるとか化学班に入っているとか無難な紹介をした。

それ以来、須田とはLINEでメッセージをやりとりするようになった。新たな味方ができたわたしは、自分でも気付かぬうちに気を抜いていたらしい。いつものように悠子と昼ごはんを食べていると、思わぬアクションが飛んできた。

「かえって、わたしのこともいいと思ってるでしょ」

大変申し訳ないことに、悠子が渾身の一言を放った瞬間も、わたしはほかのグループを見て人間関係の動向を確認していたのだった。不意を突かれて「そんなことないよ」の打ち消しが出てこなかった。

「わたしに興味がないんだらうなって前から思ってたの。それは仕方ないことかもしれないけど、明らかにこっちに伝わっちゃうのはどうなの？」

冷静なトーンだったけれど、目が泳いでいて、相当な勇氣を持って伝えてくれているのがわかる。わたしが島崎に対して同じことを思ったときには何も言えなかったというのに。

「しばらく迷ってたけど、明日から、別のところでお昼食べようと思う」

そこで初めてわたしは事の重大さに気付いた。

「ごめん、そんなつもりはなくて」

「無理なくていいよ。須田くんと食べたらず？」

慎重に立ち位置を見極めていたつもりが、一からすべて否定された気分だ。わたしに見えている程度のことは悠子にも見えていたのだ。思わず「悠子はどうするの？」と問い返す。

「毎朝電車で一緒になる子が五組にいて、その子と食べようかなって思ってるの」

完敗だ。悠子には通学電車というもうひとつのコミュニティがある。家が近いことが友達作りに関して裏目に出るとは思わなかつ

た。わたしは再び「ごめん」と言うしかない。

「いや、わたしもそこまで怒^{おど}つてるとかじゃないから。ちょっと気分を変えなくなったっていうか。たぶんかえでもそのほうがいいと思う」

急に悠子が大きく見えて、これまで悠子を侮^{あなづ}っていたことを自覚してしまう。悠子がクラスの女子と結託^{けつた}してわたしを攻撃^{こうげき}してくる可能性もあったのだ。怒^{おど}っていないと言われても、これからどんな顔をして付き合ったらいいのかわからない。

翌日わたしは熱を出した。ここで休んだらさらに立場を危うくするような気がしたが、コロナ以降、ちょっとした熱でも休むように言われている。ベッドの上でもなかなか眠れず、寝転んだままシステム英単語を開いても内容が頭に入らない。悠子からLINEのひとつでも来たら安心できるのに、スマホは沈黙^{ちんもく}したままだった。

夕方、インターフォンの鳴る音がした。出なくていいだろうと一度は無視したところに、二度目のインターフォンが鳴る。もしかしたらわたしへのお見舞^{みま}いではないかと淡い期待を抱^{いだ}いて戸を開けると、そこには成瀬^{なるせ}が立っていた。

「プリントを届けに来たんだ」

成瀬が差し出したのは保健だよりだった。「朝食をしっかりと摂^とりましょう」という緊急性^{きんきせうせい}の低い見出しが書かれている。

「なんで来たの？ わざわざ来ることないでしょ」

思いのほかきつい声が出てしまった。成瀬は怯^{ひる}むことなく「家が近いからな」と答える。

「それにわたしは保健委員なんだ。クラスメイトの健康を守る必要がある」

「ほっといてよ」

わたしは思いつき引き戸を閉めた。すりガラスの向こうで成瀬の影は数秒間立ち止まっていたが、やがて引き返していった。

あの様子ではわたしが欠席している限り、毎日やって来るに違いない。わたしは熱を下げる方法をスマホで検索した。その最中に須田から「ゆつくり休んでね」と体調を気遣^{きづか}うメッセージが届いたが、それどころではない。「ありがとう」の文字が入ったピカチユウのスタンプで無難に応じ、保冷剤^{ほれいざい}を枕^{まくら}に敷き詰めたり、熱を下げるツボを押したりと、目についた対処方法を可能な限り実践^{じっせん}した。

その甲斐^{かい}あつてか翌朝には熱が下がった。体温計の三十六度の表示にガツポーズしたのは初めてだ。登校すると悠子が「大丈夫だった？」と気遣^{きづか}つてくれて、悪いのはわたしなのにと申し訳なくなる。

「きのう、五組の子とお昼食べたんだけど、大人数で、あんまりしつくり来なかった感じで……。今日からまた、一緒に食べてもいい？」

わたしは悠子の手を握^{にぎ}り締めたくなかったが、そんなことをして気味悪がられたらいけない。

「いいの？」

極力明るい調子で言うと、悠子はうなずいた。

昼休み、わたしはこれまで黙^{だま}っていた東大志望のことや、須田との関係について説明した。

「ごめんね。なんとなく恥^はずかしくて、言いづらくて」

「そういうこともあるよね」

悠子は大学を出て公務員になりたいという目標を話してくれた。とりあえず東大に行くことと決めただけのわたしより、しつかり将来のことを考えている。「悠子ならなれるよ」の言葉が素直に口から出てきた。

オープンキャンパス当日、わたしと須田は朝の七時に京都駅で待ち合わせた。(中略)

新幹線では隣の席を取ったものの、会話はせずに勉強していた。須田の存在は勉強の邪魔にならないのがいい。わたしは黙々と赤シート^{すく}を滑らせながら英語の文法問題を解いていた。

赤門^{せくもん}前では多くの高校生や保護者がスマホで写真を撮^とっていて、さながらテーマパークのようだった。USJに任天堂エリアがオープンしたとき、青空を背景にした同じ構図を飽きるほど見たのを思い出す。(中略)

キャンパスでは高校生が思い思いに歩いていた。大津でいえばわ湖大花火大会レベルの人出である。膳所^{せせ}駅^{せき}から伸びる閑散^{かんさん}としたときめき坂を思ったら、急に故郷^{こきょう}が恋^{こい}しくなってきた。歩いている人たちも心なしか都会的に見えて、膳所^{せせ}高の制服を着てきたわたしたちが場違いに感じる。洗練された私服や、見たことのないデザインの制服など、普段はファッションに興味がないのに気にな

つてしまう。

ふと、わたしと同じセーラー服が目に入った。奇抜な制服ではないし、別の学校とかぶっていてもおかしくない。視線をその人物の顔に移した瞬間、わたしは悲鳴を上げそうになった。向こうもわたしたちに気付いて手を上げる。

「おう、偶然だな」

成瀬は通学に使っている黒いリュックを背負い、大津市のご当地キャラ「おおつ光ルくん」のトートバッグを提げていた。髪はベリーショートと呼んで差し支えないほど伸びており、二度見されるほどではない。

「わあ、成瀬さん」

須田はわたしほど驚いた様子はなく、「午前中はどこ行ってたの?」と話しかける。(中略)

成瀬が資料を出して説明しはじめそうになったので、「わたしたち、お昼ごはん食べに行くから」と遮った。

「成瀬さんもよかつたら一緒にどう?」

須田が余計なことを言う。彼にとつては遠き地で出会った貴重な同窓生なのかもしれないが、わたしにとつては極力関わりたくない相手である。成瀬だってわたしに対していいイメージはないだろう。当然断るだろうと思ったが、「そうだな」と言っただけで済んだ。

学生食堂はカフェテリア方式で、好きな主食やおかずをとって精算するタイプだった。わたしがほとんどささみチーズカツと冷奴をとったところ、成瀬も主菜にささみチーズカツをとっていた。同じ給食を九年間食べ続けると、昼に食べたいものが似てくるのだろうか。

テーブルにはわたしと須田が並んで座り、成瀬はわたしの前に座った。

「成瀬さんはどうやって来たの?」

須田の問いに、成瀬は深夜バスで来たと話した。個室タイプの座席で、思ったより快適だったという。わたしも一応「ふーん」などと相槌を挟んだが、この状況にイライラしてきて、途中から黙って食事に専念した。成瀬はさっき言っていたアイソトープがなんとかという講義についても説明をはじめ、須田がうなずきながら聞いている。

「わたし、午後は一人で回るね」

なんなら須田も成瀬のほうが理系同士で話が合うだろう。わたしが立ち上がると、須田は「じゃあ、後でね」とのんきに言う。目が合ったらまた動けなくなりそうなので、成瀬のほうは見ないようにした。

食器を返却口に片付けて食堂を出る。午後は文学部を見に行くつもりだったが、なんだかすべてがどうでもよくなってきた。いったん東大を抜けようと門に向かって歩いていくと、後ろから「大貫」と呼ぶ声がした。

振り返ると成瀬が一人で立っている。

「行きたいところがあるんだ。付いてきてくれないか」

「須田くんは?」

「大貫と行きたいと思ったんだ」

わたしの家での出来事を忘れたかのように堂々としている。あの後成瀬とは一言も話していない。熱にうなされて見た悪夢だったのだろうか。

「そんな怖い顔をしないでいい。旅は道連れというだろう」

成瀬はわたしの腕に軽くタッチしてから歩き出した。門を出て少し歩き、地下鉄の入口に入っていく。やっぱり戻ろうかと迷ったが、好奇心が勝った。

成瀬は池袋行きの地下鉄に乗り込んだ。空いている座席に並んで腰を下ろす。

「花火大会ぐらい人がいたな」

成瀬の一言に、同じ大津で育ってきたことを実感してしまう。

「どこで下りるの?」

「池袋」

「何があるの?」

「行けばわかる」

訊くだけ損だったなと思っっているうちに池袋に着いた。

成瀬の目的がわかるまで、時間はかからなかった。改札を出てすぐ「西武池袋本店」の文字が目飛び込んできたのだ。見覚えのあるSEIBUのロゴがそこかしこに散らばっている。大津市民が失った光景と再会し、マスクの上から口を押さえた。たしかに、草津市民である須田とはこの感覚を共有できないだろう。

「写真撮ってくれるか」

そう言っ成瀬はわたしにデジカメを持たせ、地下入口に立って真顔でピースサインをした。道行く人々が「なんやこいつ」という顔をしながら入っていくので、わたしは慌ててシャッターボタンを押す。ここは東京だから「なんだこいつ」が正しいだろうかと思いつながら、成瀬にデジカメを返した。

店に入ると、初めて来たはずなのに懐かしさを覚えた。西武大津店とはテナントも品揃えも全然違うのに、館内の空気が西武なのだ。成瀬は目に涙を浮かべている。ずいぶん大げさだと笑いたくなるが、わたしの胸にもこみあげるものがあつて、うまく言葉が出てこない。

「地上行っ、外から見よう」

エスカレーターまでたどり着くにも人をよけて歩かなければならない。西武大津店がいつもガラガラだったことを思い出す。

店の外に出たら、自分が小さくなったような錯覚に陥った。西武池袋本店は巨大で、わたしの考えるデパートの五軒分ぐらいはあつた。西武大津店の一階の端で営業していた無印良品だけで一つのビルになっている。「池袋駅東口」と書かれた入口もあるが、どいう構造になっているのだろう。

また成瀬から写真を撮るよう頼まれ、わたしを道連れにしたのはカメラマンにするためだったのだと悟る。なんだか腹立たしくなり、「わたしの写真も撮ってよ」とスマホを渡した。成瀬の撮った写真はわたしの姿とSEIBUのロゴがちゃんと収まっている以外、特筆すべき箇所はなかった。

「本店はすごいな。もはやデパートと言うより街だな」

成瀬は興味深そうにいろんな角度から写真を撮っている。

「わたしは将来、大津にデパートを建てようと思ってるんだ」

こんなふう目標とも夢とも野望ともつかないことを気安く口に出せたらどんなに楽だろう。あの寂れた街にデパートを出店するのはさすがに無茶だと思うが、わたしが反論したところで成瀬が考えを改めるはずがない。

「今日はそのための視察？」

わたしが尋ねると、成瀬は「そうだ」と満足気に答えた。

東大に戻る地下鉄の中で、わたしは成瀬に「1」と尋ねた。成瀬は意外そうな表情でベリーショート髪に触れる。

「2」

「3」

反応を見るに、深刻な事情があるわけではないらしい。

「4」

意味がよくわからず黙っっていると、成瀬が続けた。

「入学前の四月一日に全部剃ったから、三月一日の卒業式には三十五センチになっているのか、検証しようと思っただ」

わたしは思わず噴き出した。小学生の頃、朝礼台に上る成瀬の肩まで伸びる直毛を見て、わたしもあんな髪だったらよかったのにと羨んだのは一度や二度じゃない。

「5」

わたしだって縮毛矯正したことで、地毛が伸びるスピードがわかつた。

「6」

一瞬納得したが、同意するのは悔しくて「そうだね」と軽く答える。

「しかし短髪が想像以上に快適で、伸ばすのが面倒になってきている」

成瀬は頭頂部の髪をつまんで言った。

「せっかく剃ったんだから、最後までちゃんとやんなよ」

また憎まれ口を叩いてしまったが、成瀬は真顔で「大貫の言うとおりだな」とうなずいた。

「この前、せっかく来てくれたのにごめんね」

思い切って謝ったのに、成瀬は「何のことだ?」とはぐらかした。それ以上追及するのも野暮な気がして、何も言わないでおい

た。
東大に着いた瞬間、成瀬は「また二学期に会おう」と言い残して雑踏に消えていった。東大を目指しているのかどうかも定かでな

かったが、尋ねたところで腑に落ちる答えは返ってこないだろう。

スマホを見ると、須田から「これから理学部の説明会です」とメッセージが入っていた。わたしは「文学部の模擬講義に行ってみ

ます」と返信し、キャンパスマップで文学部の位置を確認する。

一人になって改めてまわりを見ると、いろいろな人がいる。さっきは派手な人ばかり目に入っていたけれど、地味な雰囲気の人も

いるし、普段着でふらつと来たような人もいる。わたしの描く相関図の外で暮らしている人たちも、それぞれの相関図の中で生きて

いる。これだけ多くの人がある世界で、線がつながるなんて奇跡みたいな確率だ。

わたしは文学部に向けて歩を進めながら、二学期がはじまったら今日の出来事を悠子に話したいなと思った。

(宮島未奈『成瀬は天下を取りに行く』より)

* 1 湖風祭……滋賀県立膳所高等学校の文化祭。七月に行われる。

* 2 草津……滋賀県草津市。

* 3 コミュ障……コミュニケーションが苦手な人を表す言葉。

* 4 オープンキャンパス……学校が敷地を受験生のために開放して見学会などを実施するイベント。

* 5 化学班……化学部。膳所高校では部活動を班活動という。

* 6 赤門……東京大学本郷キャンパスにある門。

問一 } 線部 a 「ご多分に ()」、 } 線部 b 「 () の見物」とありますが、 () にそれぞれひらがな、三字を入れて慣用

句を完成させなさい。

問二 | 線部 1 「想定外の事件が起こる」とありますが、「わたし」が想定していなかったのはどのようなことですか。十五字以

内で答えなさい。

問三 | に入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 急激に面倒になる傾向があっただけかもしれない
- イ 気持ちのいい相槌を打てばいいだけかもしれない
- ウ 別の人間といると気が散るだけかもしれない
- エ 人見知りで恥ずかしかっただけかもしれない
- オ 話が合う相手がいなかっただけかもしれない

問四 ―線部2「気持ちが盛り上がるのがわかる」とありますが、当てはまらないものを次から二つ選び、記号を五十音順に答えなさい。

ア オープンキャンパスに行くなら大貫と一緒にいきたいという須田の気持ちが伝わってきて、うれしい気持ちがあふれてきたということ。

イ 自分が行きたいと意思表示さえすれば、あこがれの東大を二人で見学できて、東大志望の気持ちが強くなってがんばれそうだということ。

ウ 須田がオープンキャンパスに行くのは大貫次第だと言ったので、自分に親しみを持ってくれていると感じ、いい気分になったということ。

エ 男子に頼られるのはじめてだし、須田と一対一で東京まで行けば付き合うことになりそうで、今後の展開に期待を寄せているということ。

オ 自分の決定が相手の行動に影響を与えらるほど、相手が自分に心を寄せてくれたのが今までになく新鮮で、気分が高揚しているということ。

問五 ―線部3「気を抜いていたらしい」とありますが、これは「わたし」のどのような態度を表していますか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問六 ―線部4「侮っていた」とありますが、ここでの「侮る」に最も近い意味の言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 軽視 イ 冷淡 ウ 嘲笑 エ 傲慢 オ 侮辱

問七 ―線部5「同じ大津で育ってきたことを実感してしまう」とありますが、それはなぜですか。解答欄の「自分と同じように成瀬も」という書き出しに続けて、その理由を三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問八 ―線部6「わたしの胸にもこみあげるものがあって、うまく言葉が出てこない」とありますが、なぜだと考えられますか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア あこがれの東大を見学したついでに池袋に行き、有名なデパートを目の前にして、やっと本物を見ることができたという感激で胸がいっぱいになったから。

イ 地元の大津市をはなれて上京し、心細くなっていたところに見慣れたデパートを目の当たりにして、故郷に帰ってきたような気持ちになりホッとしたから。

ウ 大津市民の生活に溶けこみ親しまれていたデパートが閉店してしまい、池袋で同じデパートを見て、幼い頃からの記憶がよみがえって懐かしくなったから。

エ 大津市にも同じデパートがあるのでそれとつい比較してしまい、池袋とは規模や品揃えが違いすぎて、本場のレベルの高さに言葉を失ってしまったから。

オ 大津市には現在デパートがないので、東大に入って力をつけて、大人になったらいつか大津市にデパートを建ててやるという大きな希望が生まれたから。

問九 本文中の「1」「6」に当てはまる内容を次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ちゃんと厳密にやりたかったんだ。それに、美容院に行くと、内側と外側で長さを変えられてしまうだろう。全体を同時に伸ばしたらどうなるか、気にならないか？

イ そりゃ訊きづらいでしょ

ウ 人間の髪は一ヶ月に一センチ伸びると言うだろう。その実験だ

エ はじめて訊かれたな。みんな訊きづらいんだろうか

オ どうして坊主にしたの？

カ 全部剃らなくても、ある時点での長さを測っておいて、差を計算したらよくない？

問十 — 線部7「わたしの描く相関図の外で暮らしている人たちも、それぞれの相関図の中で生きている」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 世の中には、わたしの身の回りの人々とは直接関わりのない人たちがたくさんいて、彼らもわたしの知らないさまざまな人間関係の中で生活しているということ。

イ わたしが自分の頭で想像できる世界以外にもたくさんの人たちの生活があり、わたしとは異なる人それぞれの価値観の中で生計を立てているということ。

ウ わたしと同じような生活水準以外の人たちもたくさんいて、派手な人ばかりではなく、地味な雰囲気の人、普段着でふらつと来るような人もいるということ。

エ わたしが人間観察できる範囲にいない人たちも、わたし以外の誰かにそれぞれが観察され、興味関心を持ったり持たれたりしながら存在しているということ。

オ わたしの生活圏の外で暮らしている人たちのほうがずっと多くて、わたしの知らない世界でみんなそれぞれの個性を生かして暮らしているということ。



東大特待Ⅰ（1月12日）

ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解答用紙
(50分)

[illegible]